

# 「ハーンの紀行文の中の怪談」

- 令和2年5月2日 怪談文芸研究会 発表者：井上真史
- 1 位置づけ
  - 小泉八雲の紀行文の中の「怪談」を集めることで、整形され組織化された文学と、現場で語られたオーラルな話の中間の姿が見えてくる。
  - 紀行文内怪談は具体的な土地と結びつくため、町おこしに利用されやすい。「松江ゴーストツアー」で回るスポットの多くはハーンの小説ではなく紀行文を出典とする。紀行文怪談は文芸と土地を再接続する接着剤となっている。  
→「松江大橋の人柱」「大雄寺の幽霊飴」「普門院橋」など
  - アメリカ時代の文章からは後の日本時代に繋がる「人類学あるいは民俗学的興味」「マイノリティや辺境への視点」「再話文学へと繋がる萌芽」が見て取れる。
- 2 「雪おんな」に至る道
  - 紀行文「幽霊とお化け」——ハーンが金十郎から初めて雪女の話を知る。ここでの雪女は伸び上がりのような妖怪として紹介される。
  - 紀行文「日本の庭にて」——柳の霊との異類婚姻譚。正体を明かし子を頼み姿を消す異類の母。
    - 祇園女御九重錦 三段目「三十三間堂棟由来」
      - 柳の精お柳が命の恩人横曾根平太郎と契り、一子緑丸をもうけるが、もとの柳が三十三間堂の棟木として切られ、お柳は名残りを惜しみながら人界を去る。歌舞伎でも上演される。
- 3 「蒲団」
  - 『日本の面影』1・2収録の紀行文の中に怪談は非常に多いが、そのほとんどはあらすじまたは聞き書きである。しかし「蒲団」「幽霊飴」「柳の霊」ほか2つは情景描写が微に入り細に入り、非常に感情移入する書き方をしている。印象派的文学に近い。
  - ナラティブの中の「情」への強い共感と来歴。
- 4 アメリカ・インド時代
  - 「ある奇妙な体験」
    - 解説の平川によるとシンシナティ時代のハーンはこの混血の黒人女性本人と思われるマティー・フォーリーと同棲していたことがあったという。
    - 「降霊術者たちは娘を強力な霊媒とみなすのが常だったら彼女はそう呼ばれるのをことに嫌った」
    - 彼女の5つの体験談がまとめられている。いずれも女中として働きに出た家でのもの。奴隷などのアメリカの歴史的トピックが登場。
  - 「さまよえる亡者たち」
    - シンシナティでの幽霊にまつわる噂話4点
    - 博覧会会場での守衛の話。先に会場がかつての墓地、蒸気船事故の死体な

の死を公衆で示す場が、死に公衆の死を公衆で示す場、公衆の死を公衆で示す場などを埋めていた、軍用病院の土地と述べ、因果を先に提出してから、体験談を記述している。これはゴシックホラーの価値観によるものか、あるいは構成の技術的未熟によるものかは不明。ハーン再話文学に繋がっていくものといえそう。

- 「私の守護天使」
  - ジェーンはハーンの従姉妹
  - のっぺら三部作「私の守護天使」「奇妙な体験」「むじな」
- 「わが家の女中」
  - 西インド諸島マルティニーク在住時代（1887-1889）の女中の話。ゾンビに関する言及としてはかなり早い時代のもの。近代ゾンビ観との変化が窺える。

+